

豊田一郎は、「孤愁」5号の編集後記でこう書いている。「極論かもしれない。或いは暴言だと言われるかもしれない。しかし、あえて、書いておきたい。文学は既に死滅している。…」と。

豊田の思考は百パーセント正しい。文芸評論家の高橋敏夫は「ゼツメツ」と指摘し、柄谷行人は「近代文学の終り」と書く。豊田の言葉のように、文学を従来の「純文学」や「哲学との関わり」でイメージするような「まともな文学」は死滅しているのかもしれない。ただ、文学という器を広げたり縮めたり、社会の変化に応じて柔軟に考えれば、現在の状況を甘んじて受け入れなければならぬ、と立ち位置をずらす考え方も私のなかにはある。なぜ劇的なまでに時代は変化したのか。私は現在の日本の社会状況は一九八〇年代を境にして急速に変わったと考えている。その理由についてここで述べる余裕はないが、ただ一点言っておけば、人間が根本的な哲学を必要としなくなったからである。もちろん人間とは何か、自分はどこからきて、どこに在り、どこへ行こうとするのか、という内在的な問いはある。しかしその問いかけは、哲学では回答不要になり、擬似的なカルトやパソコン文化を主流とするバーチャル世界に収斂されてしまった。だからこそ豊田の意見に共感を覚える。だがしかし、ここで私は踏みとどまって、人間の側からではなく文学の側にたつて、文学を擁護し、生き延びさせようと考えている。村上春樹はこの二月イスラエルのガザ攻撃で、無垢なパレスチナ自治区の女性や子どもが虐殺されるのを前に、エルサレム賞の受賞か辞退かで悩んだ末、あえてイスラエルに行く道を選び、受賞スピーチでイスラエル批判を展開した。有名な「壁と卵」の比喻である。体制を壁に、個人を卵に例えて、高い壁に挟まれ、壁にぶつかって壊れる卵を思い浮かべた時、どんなに壁が正しく、どんなに卵が間違っているとしても、私は卵の側に立つ」と強調した。私はこのスピーチを聴いたときドストエフスキーの「たとえ真理はキリストのほかにあり、また誰かがそのことを証明したとしても、私はむしろ真理よりもキリストとともに歩む」という有名な手紙の「節を思いだした。明らかに村上はこの喩えを使ったのだ。そこであえて私もうなれば、文学の絶滅という事実が百パーセント現実であり、またそれが証明されたとしても、私は文学の側に立ち人の心の闇を追いたいと思う。

「文学界」誌上での同人雑誌評がなくなっても嘆かず、豊田の決意である「大間のありようを、人間の存在を追い求めて書き続ける修業を」私たちもまた一人で井戸を掘るように歩み続けていけばよい。

今回は現代小説を一篇ご紹介しながら、「文学」について読者諸氏に考察いただく場を提供したい。その小説は昨年（二〇〇八年）の大江健三郎賞を受賞した、岡田俊規「羽たしたちに許された特別な時間の終わり」（二〇〇七年、新潮社）である。岡田は一九七三年生まれ、劇作家や演出家としても活躍している。同書は一つの短篇から編まれているが、三月の5日間」が秀逸である。二〇〇三年三月、イラク空爆開始そのときに、渋谷のラブホテルで四泊五日する見知らぬ同士の若い男女。テレビを見ながら「あ、始まったんだね、やっぱり戦争」と感じるどころのない現代。大江がなぜこの作品を推奨したのかを含めて、ぜひ作品の背後を想像いただきたい。現代の戦争について私たちの振る舞い方に

は幾通りかあるだろう。戦争に反対し意思を行動で示す方法、戦争には反対だが自分には直接関係ないので黙って見ている生き方、興味も関心もないので何も考えないしイラク戦争のニュースも知らない、とする立場。

どの処し方が正しいか、と言っているのではない。作家、物書きとして、現代をとらえ、人間の本質を追究するにはどう書けばよいのか、を提示しているのである。もしこの場が「文芸教室」で、二〇〇三年のイラク戦争をテーマに小説を書くとの課題が出たら皆さんならどう書くであろうか。それをお考えいただきたいのだ。その上で前述の岡田の作品を読んでいただければ、と思うのだ。理屈ではなく、文学は感じるものだからである。

さて同人雑誌を順不同に見ていきたい。『文藝界』での『同人雑誌評』がなくなり『文学街』『季刊遠近』『大間像』をはじめ、いくつもの同人雑誌で自らその欄を設けようとの試みがなされ嬉しいかぎりだ。本誌は季刊であり、三カ月ごとにこの原稿を書いている。締め切りが発行の約二カ月前なので、タイムラグがあつて恐縮だがお付き合いいただきたい。今号では基本的に各誌今年の3月まで発行されたものが対象となっている。

『山形文学』96集では、『高橋菊子 婆アバたちの恋』をおもしろく読んだ。ハナエ婆は亭主のトメ爺をおいて、初恋の人に会いたいと家を出た。隣人の美代と一緒に探してほしい、と頼むのだが、美代の心も揺れ出す。高齢のふたりの女性が家（昏常）を離れる小さな冒険譚で、読んでいて心地がよい。この心地よさはどこからくるのだろうか。おそらく作者の人間観によるものだろう。

『樹海』17号の『結城忍 憂色』は、比喻こそ巧いが、そっけない文章でまるで報告文のよう。しかし読後なぜか印象に残る。主人公は三十代の女性。夫は幼い子を残して交通事故故死。実はこの夫婦は再婚同士で会社の同僚だったという設定。前述の高橋菊子の作品同様、作者の人間観が行間にはじみ出ているから刻印を深く感じるのだろう。

『四人』83号の『伊藤文隆 夢の代償』は、公営住宅に住む五十代夫婦がセールスマンに薦められて別荘地を買うことになり、夫は別荘地を見学に行く。小市民的な夫の心情がよく描かれているが、インパクトが弱い。せっかく小市民の日常を描くのなら人間の悪意や矮小感などをくっきりと印象づければもっとよくなる。

『季刊遠近』36号の『藤野秀樹 ハワイアンフェア』の持つ明るさはなんだろう、と読後考えた。物語の定番は日常、異世界や異体験、帰還という構造を持つ。お伽噺の基本である。しかしこの作品の結末ははっきりと書かれていないが、異世界への旅立ちの可能性も秘めている。異体験もいつか日常となることを理解しつつ主人公のあっけらかんとした考え方に共感を覚える。定年間近のかばん店の支店長の男が、隣のデパートでハワイアンフェアの売り子をしている二人の女性と親しくなる。鬱屈を抱えた男は、日常から脱出するため、二人に頼まれて深夜九十九里へのドライブにつきあうはめになるのだった。映画の原作になりそうな諧謔を秘めた作品である。『難波田節子 電話の主』は、ある日引きこもりの孫から電話がかかり、オレオレ詐欺だと気がつきつつ、電話の主の訪問を受ける話。孤独を背景にした現代の社会問題を鋭く取り込み実力ある作品。

『たまゆら』73号では『平井利果 なんじやもんじや夫婦』、読み応えがある。ある日夫の不倫を伝える匿名電話がかかる。夫の女性関係には慣れっこの妻だが、実は妻もいまの夫と一緒にあったのは不倫だった。作品全体が長いのが気になるが、着想もおもしろく、描

写の細部も生き生きとしている。同74号では、**佐々木国広** **鬼灯**が秀逸。こちらは三十枚と短い作品だが構成もしっかりとして、少年の母恋い物語が巧く表現されている。文学の香気を感じた。

水戸評論「119号では**井坂美智子** **白い闇**」が目立った。農家の一家のなかでの姉妹とその子どもの出生の秘密を簡潔に描く。物語としては不満が残るがなぜか個々の描写が印象的で今後に期待したい。

時空「30号では**福島弘子** **年忌**」を戦後の都市と人間を断面的に描いた作品として興味深く読んだ。

獣神「32号のエッセイ**野田悦基** **津軽の旅**」。題名のとおり六月十九日に太宰治を訪ねる旅を書いている。同人誌に書く人たちには太宰ファンが多いはずなのに、太宰にまつわる作品にめぐり合うことは少ない。宝物を見つけたような気がした。

同様エッセイでは **新人**「48号の**菊池道人** **居場所の文学** **方丈記**」が秀逸。菊池はプロの時代小説作家、同人雑誌への登場を歓迎したい。

小説家「130号**刺賀秀子** **目のない蝶は**」は、結婚して二十年経った妻が、猫の飼育をめぐっての夫の諍いを契機に別居を決意する話。孤独や偏愛が小説としてうまくまとまっている。**類ちゑ子** **黄色い車**」は視点が俯瞰的でおもしろい。道路に落ちていた大金を盗ったと勘違いされた女性の悲劇を描くのだが、あくまでも高いところから舞台を見ているような感がある。作者の資質だろうか。

六月の群れ「45号は、**はぎわらようこ**」 **七月九日の花火**」、**野元正** **国境の町**」、**夏森修平** **ザリガニ**」の三編が優れている。はぎわらの作品は堺市の昭和二十年大空襲から題名をとっている。野元の作品は、アメリカのカナダ国境に近い町にやってきた医者で日本人留学生の男が失恋の傷を癒し、そこでの新しい出会いを描く。ザリガニは、倒産した地元のスーパーに勤めていた五十代の男が、道路工事現場で交通整理員をやりながら水路のザリガニに鬱屈をぶつける話。それぞれ筆が達者でテーマも明確。質の高い作品だ。

詩と眞實「716号の**てらしせい**たるう **十二月の蛙**」は、十五年間勤めた老人ホームを辞めて、転職のための建設車両機械講習中にかつての勤務先の嫌な人間関係を追想する話。題名に比喻された人間観がおもしろい。717号は**園村昌弘** **神隠しの夏**」が圧巻である。母が家からいなくなった三カ月間のことを語る高校生の男の子、そしてその母の証言と二部構成で展開されている。戦後という時代、熊本の遊郭という異空間のトポスについて情感をこめて描く。語りが二つに分かれているぶんだけ心理描写が難しいが、暗喩を使いながら、叙述していけばもっとよい作品になる。

孤独「5号の**豊田一郎** **洪水は何時の日に**」、千葉の支局長に転任した通信社の記者がいきつけの居酒屋の女性と親しくなるが、定年後千葉に戻ってみるとその女将は冷たい。時の経過は人の心を変えてしまうのか。洪水は大江健三郎の著作の題名にもあるように、神話的な意味がある。洪水で 何もかもがなくなれば」という登場人物の結末の言葉に、リセットできず日常のなかに埋もれるしかない人間の寂しさや本音が表現されている。

労働者文学「64号、**黄英治** **壁を打つ旅**」は、在日の一家に突如起きた悲劇を長女の視点で描く。父が韓国に帰郷した際、スパイ容疑で逮捕され死刑囚となってしまう。高校生の長女は日本でその救出運動を展開することになり、父が捕らえられている監獄の壁を、東京の小菅拘置所に比喻し、その壁を叩きつつけるのである。私たちは人生のなかで何か

為すための長い旅にでているのだ。

九州文学」4号は鶴ヶ野勉「コアシサシ」。歯科医の男は絶滅危惧種のコアシサシを飼っていて、ニュージランドまで来てその鳥を放とうとしている。彼はアマチュアカメラマンでもあり、科学開発とその陰で消えていく自然をテーマに写真を撮る。そんな場で出会った老父を介護する女性と親しくなり、放鳥したコアシサシは戻ってくるが、女性は亡くなった。テーマが明確で会話の九州弁も効果的でよい。

大間像」178号の根保孝栄の「同人雑誌評」を楽しみにしている。辛口で的確でしかし同人雑誌に集う人々に温かい目を向けている。見習いたいと思う。

北海道上士幌町の町民芸誌「火群」34号に荒井登喜子が「うつつ」という作品を書いている。建具職人の現場に若い女性が入職し経営者と親密になる話だが、病氣や死などマインスイメージが強調されている。テレビドラマの原作になるような物語性が作者の特徴で先々の作品が楽しみ。

今回読んだ作品のなかで特筆すべきは「文学街」259号岩谷征捷の短篇「ゆきあひ」。この小説の魅力を短い言葉で語るのには難しい。一言で述べるならば、小説を感じる、ということだ。古代より言葉は言葉（ことだま）と呼ばれ言の葉は神が司り、また神の言葉を人は感じた。近代文学をはじめ現代では「小説を読む」「映画を観る」という行為で芸術は成立し、人は解釈を先行させる。岩谷の作品は読むのではなく感じるこの大切さを私たちに教えてくれる。ストーリーを読むのではなく、生と死の往還、一本の樹木が内包する世界を感受でききるかどうかが本質的に文学を感じることなのだ。同号間宮武「夜叉王」は昭和二十二年のころの社会情勢を見事に描き出して圧巻。260号通雅彦「夫の才」は、サラリーマンの夫が町の商店を見ると潰れるかどうか見分ける才覚を持っている、その妻に視点をあてた話でテンポが小気味よい。商店を見分ける才能という小ネタも異色でおもしろい。また同号の川島徹「山鳩」は学校を舞台にした教育ものだが、ミステリアスな展開で新しい可能性を示した。

全作家」の前号73号では加藤幸一「石」。妻に死なれ、苦勞をしながら子どもたちを育て、不景気で失職する作者の等身大の姿を描いている。僕」と書けばたちまち本当の自分自身と乖離していく小説の魔術を飼い慣らしてこれからも書き続けてもらいたい。

紙数の関係でとりあげることができなかったが、気になった作品を挙げておく。

岩★しよう」17号では岩越孝治「流れ花」、山音文学」114号では泉黒冬「白鳥」、江別文学」72号では、矢野静子「轍」が気になった。内海文学」127号、なんじやもんじや」通巻7号、郡山文学」33号、内容が充実している「水晶群」56号、北斗」3月号、断絶」104号、文芸東北」の各誌、また原石寛の一連の「自薦作品集」をおもしろく読んだ。ベスト5は、岩谷征捷「ゆきあひ」、藤野秀樹「ハワイアンフェア」、高橋菊子「婆アバたちの恋」、難波田節子「電話の主」、佐々木国広「鬼灯」。

皆様よりたくさんのご本をお贈りいただき。礼状もだせないまま歳月のみが過ぎでしまふ。この場をお借りして皆様に厚くお礼を申しあげたい。

筆者プロフィール：

文芸評論家、放送作家、NHK学園自分史講座添削講師。現在時事通信、北海道新聞で書評を担当。テレビでは愛川欽也、武田鉄矢、中西哲生、香坂みゆきなどのレギュラー番組の企画・構

成、台本を担当。人気番組 愛川欽也パツクインジャーナル」ではコメンテーターとしてもレギュラー出演中。著書 村上春樹とドストエーフスキイ」新宿小説論」ほか、共著 立松和平 ドロップアウト」ほか。